

〈研究ノート〉

セルゲイ・ニコラエビッチ・キターエフとその日本美術コレクション

——美術館へ至るまでの困難な道のり

B・G・ボロノバ

私がプーシキン美術館の版画部で、日本美術の膨大なコレクションの保管係として仕事を始めたのは、一九五〇年代のことであった。このコレクションを最初に収集し、所有していたのは一体誰であったのか、どこでどのようにして集めたのか、いづどのようなにしてプーシキン美術館に納められたのか、これらを説明することから私の仕事は始まった。

当時は保管文書の所々に記されているS・キターエフという名前以外は、何もわかっていなかった。かつては美術品コレクターや愛好家の間でこの名前は有名であったのだろうが、その後忘れ去られてしまった。しかし彼のコレクションは世界中で最も初期のものの一つであるばかりでなく、有名なアメリカの版画専門家R・キーズ氏が証言するところによれば、ヨーロッパにおける最大級のものの一つである。

モスクワとサンクトペテルブルクの古文書保管局や図書館での探索は、最初の内はほとんど何の成果も挙げなかった。⁽¹⁾その

後、この件に興味を持ってくれたプーシキン美術館の古参研究員の協力と偶然が重なったおかげで、ある程度の成果が得られた。特に力になってくれたのは、プーシキン美術館古文書保管局長A・A・デムスカヤと版画・素描部部长M・Z・ホロドフスカヤである。ホロドフスカヤはキターエフについて何か知っているかもしれないP・J・バブリノフのことを教えてくれた。⁽²⁾

私たちの熱心な懇願に答え、バブリノフは海軍幼年学校時代の同僚であったキターエフについて思い出を書き、手紙で送ってくれた。また特に貴重だったのは、かつてキターエフがバブリノフに宛てた二通の手紙で、この手紙をバブリノフはプーシキン美術館に寄贈してくれた（この二通の手紙については、たいへん興味深い内容なので、後ろに全訳を附した）。

バブリノフの手紙を読むと、「セルゲイ・ニコラエビッチ・キターエフは海軍将校で、前世紀の九〇年代に巡洋艦アドミラ

ル・コルニロフに乗って太平洋を航行していた」ことがわかる。「彼は教養豊かな人物で、裕福でした。若い頃から造形美術に興味を持ち、水彩画等を描いていました。日本を訪れた彼は日本の版画を知りようになり、停泊した港々で芸術作品を買集めました。それらの作品はしばしば破損がはげしく、彼はその場で職人（長崎ではアラキ氏）に託して修復をしました。彼は湿気が入らないように密閉した金属性の筒に作品を入れ、船内に保管していました⁽³⁾」と、バブリノフは書いています。

さらに詳しい公文書資料は海軍古文書保管局で得ることができました。これは私がエルミタージュ美術館であてもなく資料探索を続けていた時、エルミタージュの隣に、幸いにも海軍古文書保管局があったので、偶然立ち寄ってみたのである。

ここでは長年私が探し続けていたもの、セルゲイ・ニコラエビッチ・キターエフ海軍中佐の海軍幼年学校での勤務歴を、思いもよらず速やかに提供してくれた。一九〇六年一月二七日付で作成されたものであった⁽⁴⁾。

勤務歴の中には、キターエフが一八六四年六月一〇日生まれであること、リャザン県の世襲名誉市民の家の出身であること、第一ギルド階級の商人の娘、アンナ・エフィーモブナ・ザミャーチナと結婚し、一八九七年六月一九日には息子インノケンティが生まれたことが記されてあった。

キターエフはサンクトペテルブルクの海軍高等学校で学び、修了後、彼の名は母校のメモリアルボードに金文字で記された。

一八八一年一〇月一日より海軍勤務、八五年六月一日より外国航路勤務。外国、自国の多くの勲章を授与され、当初は小型駆逐艦ウラジーミル・モノマフ号に乘務し、その後帆船ベースニク号、そして巡洋艦アドミラル・コルニロフ号に乘務した。一八九六年、航海からペテルブルクに戻った彼は、海軍幼年学校に勤務し、一九一二年頃病気のため退職するまでここで勤めた。

一八九八年、キターエフはI・V・ツベタエフに次のような手紙を書き送っている。

イワン・ウラジミロビッチ様、日本コレクションのことについてですが、美術館では役に立たないでしょうか。ご存知のように、日本の芸術は西洋芸術に影響を与え、西洋の主要諸都市は機を逸せずして日本の版画や絵画を手に入れようと奔走しました。私のコレクションはまだモスクワで亜鉛の箱に入ったままです。私はコレクションをモスクワから国外へ持ち出たくありません。ロシアのために大切に守っているのです。ただ、これを無償で差し上げることができないのが残念です。このコレクションの値が一五、〇〇〇ルーブルすることを覚えておいてですか。……

一八九八年三月一五日 サンクトペテルブルク
タルゴーバヤ通り三一番地六号⁽⁵⁾
しかしツベタエフはコレクションを購入しなかった。

さらに一八年が過ぎ、コレクションは文献によるとまだ箱の

中に入ったままだった。一九一六年、キターエフは家族と一緒に外国へ出かけるにあたり、再度この問題に関して「政府がコレクションを完全な形で買い取るよう」提案している。コレクションの調査は国會議員で東洋学者のアカデミー会員S・F・オリデンブルクと、シナ学者エリセエフに任せられた。エリセエフは日本に長期間暮らしたことがあり、当地で高等教育を受け、日本語を自由に話し、また書くことができた。パブリノフは次のように書いている。

キターエフは私にコレクション調査に加わるようにと誘いました。私はキターエフとオリデンブルクに、この仕事にアンナ・ペトロブナ・オストロウーモバ⁽⁶⁾レベジェバを招くように頼みました。調査は七晩かかりました。私たちは四人は七時に集まり、キターエフ家を去るのはいつも夜更けてからでした。エリセエフは版画や絵画に書かれている多くの賛を翻訳し、それらのエキゾチックな内容を説明してくれました。

調査が終わると、アカデミー会員オリデンブルクはコレクション買取に賛同の意を表しました。キターエフは一五〇、〇〇〇ルーブルと値を付けましたが、戦時中であり、このような金はありませんでした。商談は成立しませんでした。

キターエフ一家は外国に出かける意向を変えていませんでした。戦時中は、個人の美術品コレクションは「保管」

のために戦線から遠い美術館に疎開させるということが行なわれていました。セルゲイ・ニコラエビッチとの話の中で、私は戦争が終わって一家が帰国するまで、コレクションをルミャンツェフ美術館で保管することを提案しました（私はルミャンツェフ友の会の会員でした）。セルゲイ・ニコラエビッチがこの案を妥当であると考えたので、私はモスクワに行く機会があった時、コレクション保管の可能性について早速N・I・ロマノフ⁽⁷⁾と話し合いました。ロマノフは協力すると言いました。⁽⁸⁾

この時すぐに、キターエフはルミャンツェフ美術館友の会のもう一人の会員に、後にプーシキン美術館版画・素描部研究員となったワシリー・ビケンチエビッチ・ゴルシャノフにも援助と協力を求めている。

一九一六年一二月七日付手紙で、キターエフは次のように書いている。

私のコレクションのことであなたを煩わせたくないのですが、私は個人的にこれをたいへん大事にしており、手早く売るといふことは考えていません。ただ、私はこれが公共の財産でないのが残念です。真の芸術を理解する人々に、このコレクションが与える多大な満足感とやすらぎを享受してもらいたいのですが。

彼らの後押しが功を奏し、キターエフのコレクションはルミャンツェフ美術館へ運び込まれた。その後一九二四年、ルミヤ

ンツェフ美術館は改組され、キターエフのコレクションは他の美術品とともに、キターエフが最初から目的としていたブーシキン美術館へ移されたのである。

ブーシキン美術館の日本コレクションは、今もってキターエフのコレクションがそのほとんどを占めており、いくつかの分野に分けることができる。掛軸、素描、絵本、画帖、そして主なものは錦絵版画である。ここには歌麿、北斎、広重、その他第一線の浮世絵師たちの作品がある。今日、コレクションは六、〇〇〇点を数える（個々の小品を数えると、三〇、〇〇〇点以上になる）。

ある時期、キターエフは自分のコレクションを真剣に研究している。また、極東芸術についての新刊書を読んだり、世界中に存在する主要な日本美術コレクションを調べたりしている。

私はスペイン、ポルトガル、バルカン半島以外のヨーロッパはすべて訪れ、美術館や個人コレクションを見学しました。一九一〇年には、ロンドンで古代日本芸術秘宝展を見ました。これは「ミカド」の命令により、英日博覧会を機に一時的に運ばれてきたのですが、英国王、高官、英日協会会員、パリから招待された仏日協会会員らに披露されただけで、一般には公開されませんでした。

このような体験の中で、私は自分のコレクションが質量ともにヨーロッパで第二位であることを確信しました。第一位のコレクションとは、キヨッソーネの版画コレクション

ンです。彼の遺言によって、それはジェノアの芸術アカデミーに寄贈され、そこではこの日本美術コレクションのために特別な美術館を建てました。⁽¹⁰⁾

後には、よりすぐれたコレクションがアメリカの美術館やアムステルダム、ロンドン、パリの美術館に現れるが、それにしても、キターエフのコレクションがヨーロッパにおける最大規模のコレクションの一つであることには変わりはない。

ブーシキン美術館のキターエフのコレクションの特性と重要性は、これが最も初期の日本美術コレクションの一つであることと、日本現地で手に入れたものである点である。後のオークションで購入したものではないので、一連の未発表作品も含まれている。その中には、十八世紀末から十九世紀初頭にかけての有名な浮世絵師、清長、俊満、歌麿、豊国等が描いた大きな芝居絵がある。北斎の摺物（慶賀用の錦絵版画）の『馬尽』（二五枚揃の内二三枚）、『四姓の内』（四枚揃の内三枚）、『元禄歌仙貝合』（二四点）の中の一つ「こ貝」は、他の有名な日本美術コレクションの中にはないものである。⁽¹¹⁾

その他にたいへん珍しいものとしては、あまり大きくない北斎の摺物で、その中の数点には「画狂老人」と署名してある。北斎はキターエフの好みの画家であった。「彼は実に驚くべき自然現象です」と、キターエフはパブリノフに書き送っている。このように、キターエフは北斎の署名のあるものや、北斎周辺の浮世絵師たちの作品はすべて手に入れた。北斎の描いた絵本

の四分の一がプーシキン美術館にあるのも、これで頷ける。その中でも最も珍しいものは、一八二八年に二代目立川馬の改名記念に出版された本に、北斎が描いた馬の図である。

北斎の弟子の中では、キターエフは慍々狂斎（暁斎）に注目している。プーシキン美術館には、彼の風景画（掛軸）数点と、彼の特色を示す鳥の錦絵版画がある。十九世紀中・後期の暁斎以外の浮世絵師では、特に歌川派の国貞、国芳、芳年等のものが多数ある。キターエフは芳年を「自分の心の兄弟」と呼んでいる。

一八九六年、キターエフはペテルブルク芸術アカデミーのホールで自分のコレクションの最初の展覧会を行なっている。そして翌一八九七年には、モスクワの歴史博物館で展覧会を開き、日本芸術についての講演も行なっている。また、一八九六年には一三五名の画家の絵について、簡単な『日本の絵画展覧会案内』を発行し、一九〇五年にはその改訂版を出している。なお、これには浮世絵師は含まれていない。

周知のように、日本芸術はヨーロッパの芸術に多大な影響を与えたばかりでなく、十九世紀末から二十世紀初頭のロシアの芸術意識にも影響を与えた。一八九〇年代、キターエフの他に浮世絵版画を収集し始めた画家や芸術愛好家として、I・グラバリ、S・シュエルバトフ、A・ベヌア、そしてD・ミトロヒン、V・ゴルシャノフ、S・レベジェフ等がいる。しかしキターエフと違って、彼らは日本で版画を手に入れたのではなく、ヨー

ロッパ、すなわちミュンヘン、パリ、モスクワ、ペテルブルクで購入している。一九〇一―二年の冬、S・シュエルバトフは友人のV・フォン・メックとともに、「近代芸術」展覧会ホールにおいて浮世絵版画の展覧会を開き、シュエルバトフの言葉によると、全ペテルブルクが非常な関心を寄せたということである。日本とポーツマス条約を締結した後、一九〇五―六年の冬、キターエフは三度目の、そして最後の展覧会をペテルブルクの芸術振興協会の大ホールで開いている。そして時を同じくして日本芸術の展覧会が他にもいくつか開かれた。一つは長谷川氏によって運ばれてきた「版画展」（一九〇五年）であり、もう一つはN・P・コロバシユキンのコレクションによる「中国・日本の芸術、工業作品および宗教、風俗器物展」（一九〇六年）である。

日本の芸術はロシアの芸術家たちに新しい造形の世界を開き、他の芸術思考形態の存在の可能性を示し、版画美術の分野におけるロシア派の形成に影響を与えた。特にA・P・オストロウーモバ、レベジェバ、V・P・ファリレフ等に多大な影響を与えた。A・P・オストロウーモバ、レベジェバは次のように書いている。

デューラーの次に私に大きな影響を与えたのは、日本人たちである。日本の版画を見る時、その簡素さ、簡潔さ、そして芸術的感覚の鋭さとその表現力はいつも私を驚嘆させました。……それには私の友人たちからの影響もあった

のです。彼らは皆、自分の版画コレクションの質を上げるため、良いものを収集することに余念がありませんでした。⁽¹²⁾

V・Cというイニシャルを持つある批評家は、次のように語っている。「日本芸術が近代芸術に与えたインパクトの規模は、古代ギリシャ芸術の影響のおかげでルネッサンス芸術が誕生した現象に匹敵する」⁽¹³⁾

当時、前世紀の九〇年代からのキターエフの一連の展覧会に対する多少の反響とは別に、日本芸術について、翻訳ではなく、自分の研究を書く人々が現れてくる。日本の版画について誰よりも多く著わしたのは、画家のI・E・グラバリである。彼は「衰退と復興——芸術における近代潮流概観」⁽¹⁴⁾という論文の中で、「日本版画は爆弾の炸裂音のように響き渡った」と表現しており、また日本錦絵展（サンクトペテルブルク、一九〇三年）のカタログの序文を書いたり、雑誌『芸術の世界』に大論文を発表（一九〇二年）している。この論文は、一九〇三年に単行本として出版された。

キターエフのコレクションの研究と普及は、その後も続けられた。版画部の研究員A・I・アリストバ、B・P・デニケ、N・A・シヤラバノバ、スカブロンスカヤ等は一九二〇（三〇）年にかけて、主な浮世絵師たちの創作活動について研究報告を行なっている。

一九六〇（八〇）年には、美術館内に日本美術コレクションが簡単なカタログを添えて展示された。二、〇〇〇点以上の作品

を含むコレクションの全研究目録も作成されたが、これはまだ出版されていない。

一九九三年には、日本の国際日本文化研究センターとの共同研究により、キターエフのコレクションの一五八七点にわたるカラー図版入りのカタログが、英・日語で出版された（残念ながら、これには解説がついていない）。そして一九九三（四）年には、「浮世絵里帰り展」が大阪、東京、その他の日本の諸都市で半年以上にわたって開かれた。この展覧会に向けて、日本では二三点の作品についてカタログが出版された。

このようにして、近年まではモスクワでのみ展示され、旧ソヴィエトの東洋学者や芸術愛好家だけにしか知られていなかったキターエフのコレクションが、広く海外にもその価値を知られるようになり、国際的な研究の対象にもなりつつある。

注

(1) 古い住民登録帳、一八九九年版『全ペテルブルク』を見ると、S・N・キターエフはペテルブルク市タルゴーバヤ通り三番地六号に住んでいたことがわかるが、子孫もこの家そのものも、この住所に存在していなかった。

(2) バブリノフ・バーベル・ヤーコブレビッチ（一八八一—一九六六）。キターエフの友人であり、同僚であった。後に画家となる。

(3) P・J・バブリノフがM・Z・ホロドフスカヤに宛てた手紙（一九五九年四月一七日付）、プーシキン美術館版画・素描

部所蔵。

(4) ソ連邦海軍国立中央古文書保管局所蔵、分類番号四〇六・目録番号九・件番号一七七七。

(5) プーシキン美術館古文書保管局所蔵、分類番号六・目録番号一・件番号一四七五。

(6) オストロウーモバ・レベジェバ・アンナ・ペトロブナ（一八七一—一九五五）。画家。

(7) ロマノフ・ニコライ・イリイチ（一八六七—一九四八）。ルミャンツェフ美術館版画部設立者。

(8) P・J・バブリノフがM・Z・ホロドフスカヤに宛てた一九五九年四月一七日付の手紙。プーシキン美術館版画・素描部所蔵。

(9) このような数字の上での差が生じるのは、画帖の場合、一冊の中に数百点の作品が含まれており、美術館の規則として、その画帖の各ページに目録ナンバーが付けられているからである。

(10) S・N・キターエフがV・V・ゴルシャノフ（前記参照）に宛てた手紙より。

(11) M. Forrer and R. Keyes. "Very like a whale? -Hokusai illustrations for the genroku poem shells." "In a shelf of Japanese papers in tribute to Heinz Kaempfer on his 75th birthday. The Hague." 1979 pp. 35-57.

(12) A・P・オストロウーモバ・レベジェバの『自伝』（レニングラード、一九三五年刊）一卷 二〇三頁（モスクワ、一九四五年刊）二卷 三八頁。

(13) 「芸術の世界——ヨーロッパにおける東洋・日本芸術」（署名はV・C・。おそらくV・チュイコと思われる）。『世界の絵画』（サンクトペテルブルク、一八九一年刊）番号一一七四、五九—六二頁。

日本芸術の諸展覧会の反響と、日本芸術が近代芸術に与えた影響については、B・ボロノバの「ロシアにおける日本芸術の収集と研究の初期段階」（I・E・ダニロバ七〇歳記念文集）（プーシキン美術館、一九九二年刊）により詳しく書かれている。

(14) 雑誌『ニーバ』の文学付録。（サンクトペテルブルク、一八九七年、一月—二月号）

附

S・N・キターエフがP・J・パブリノフに宛てた書簡(一)

(一九一六年八月五日付)

パーベル・ヤーコブレビッチ様

長いことあなたとお話してないので、あなたがどのくらい日本の美術や画家の名前をご存知なのかわかりません。そこでこの私の提案に気分を悪くなさらないで頂きたいのですが、私と一緒にコレクションの調査をする時まで、以下の文献を勉強しておいて欲しいのです。

フランス語ではビングの著書二冊。その内の一冊は「L'art Japonais」という小画集で、絵画、版画、銅物、陶器、漆器について書いてあります。また主な画家たちの署名や画名や印章が載っています。この本はメリエ氏かボリフ氏の所、またはおそらく公立や私立図書館で見ることができます。私のところにもあります。もう一冊のビングの著書は大きく、多数の絵があり、今では稀な本です。この本に私はお金を惜しまないつもりですが、どこにもありません。パリのメリエ氏を通してみてもだめでした。売り切れです。しかしもしかすると、ペテルブルクの公立図書館にあるかもしれません。V・V・スタソフの生前に尋ねておかなかったことが悔まれます。

英語ではアンダーソンの本があると聞いたことがありますが見たことはありません。公立図書館のどのセクションで尋ねたらよいかについては、美術部だと思います。スタソフの後、マ

イコフが部長になっていると思います。

ロシア語ではクリフツォーバ女史の本があります。私も持っていますが、私のコレクションの写真も数点載っています。このクリフツォーバ女史とビングの本は、喜んであなたにお貸ししたいのですが、一カ月ほど先のことになってしまいます！

筆者注 これらの書簡が記されている用箋のヘッドに、「ザミヤーチン兄弟チエルノフスキ炭鉱会社」のマークが入っているが、これはもしかすると、コレクション購入に伴う膨大な資金の出所の一つかもしれない。ザミヤーチンの娘である妻の持参金として、キターエフはその金を受け取ったと考えられる。そしておそらくこのために、キターエフはコレクションを妻にプレゼントしようと思ったのではないか。このコレクションが初期の文献の中で、キターエフ夫人のコレクションと呼ばれているのもこのためであろう。

最近、仏日協会とか、英日協会とか、露日協会とかいうものが作られるのは、何でも日本的なものに傾倒する流行でしょう。日本美術についての本も書かれています。この種の本で、フランス語が英語でまともなものがあるかどうか、また購入について調べて頂けると有難いのですが。費用はもちろん私が持ちます。

日本語で日本美術史を編集するという困難な仕事は、国際バリエ展の後、始まりました。今日では数巻の立派な本が完成し、六〇ポンドします。私はそれをロンドンの英日展で見ました。

しかし一点しかなかったので、買うことができませんでした。公立図書館にはないでしょうか。帝立芸術アカデミーが所有しているとは思われません。

日本美術史の編纂が困難な理由は、画家の数が膨大であることと、絵に署名してある雅名が本名ではなく、しかもよく変わるからです。そのような慣習だったのです。どの派を継承しているかを探す鍵は、弟子が師の雅名の一部を受け継いでいるかどうかです（普通は、二つの漢字から成っている雅名の中の、一つの漢字を受け継ぎました）。そしてこのような漢字は、おそらく二〇、〇〇〇個ほどあるでしょう。歴史を編纂する人はそれを全て知って、意味を理解していなければなりません。例えば北斎は、自分の優れた弟子たちに最初の「北^{*}」という字を与えました。「北溪」「北馬」「北嶺」などです。「豊国」の弟子は「国貞」、「岸駒」の弟子は「岸岱」「岸徳（連山）」などです。

* 覚えている限りでは、「ホク」とは北のことです。「斎」は高いとか偉大という意味で、全体として、「北の偉人」と訳されるはずで、「溪」と「馬」がどういう意味なのか、尋ねてみなかったのではありません。

北斎は自分の雅名を何回も変えました。私のコレクションの中の彼の作品にもいろいろな署名があります。例えば宗理などです。この天才的な人物の経歴は、日本語やフランス語、ドイツ語、英語、イタリア語になっています。日本語とフランス語のものは、彼の肖像画付きで、私も持っています。あなたにお

貸しましょう。私が日本の美術を知るようになったばかりの頃、私は彼に夢中でした。彼のお墓参りにも行きました。お墓で撮った写真と、私が描いた水彩画をお見せしましょう。彼の親類はもう生きていませんでした。三〇、〇〇〇点もの独創的な作品を描いた北斎の稀に見る筆と、ファンタジーの飛翔に敬意を表しながらも、後に私は彼より優雅で優美な画家たちを見出しました。その中には北斎に勝るとも劣らない画家もいます。ですから、今は私のお気に入りたくさんいます。それにしても、やはり北斎は卓越しています。北斎の作品はすべての基本であり、造形美術の見本であり、おとぎ話、歴史、小説などを詩的に表現するための手本です。特に彼の筆は稀に見る生命力を持っています。（北斎自身これを認識しており、次のように言っています。「六〇歳になって、ようやく筆遣いとはどういうものかを理解した。百歳になれば、絵が生命を帯びるであろう」と。）

日本人の中で最も日本人らしいのは光琳です。私は彼の秀作と言える一点を持っていることを幸せに思います。応挙は年によって描く題材や画風を変えました。私が持っている婦人像はとても繊細な中国様式で描かれています。滝図と恵比寿図はもっと自由な画風です。私は彼のある掛物を見るために特別な旅をしました。それは巨大な滝の絵で、寺の縁日には本物の滝の代わりとして、寺の後ろにある垂直の崖に掛けるのです。本物の滝とこの偉大な巨匠の筆によって描かれた滝と、どちらを鑑

賞するのが良いかを決めるのは難しいことです。この寺ではまた、とても大きな崖の掛物を見ました。崖の横を鴨（実物大の）が飛んでいるのです。応挙の家がこの寺の檀家だったので。画家たちは自分の寺に最も良い作品を寄進しました。また、ここには他に人間の情欲を描いた三本の巻物があり、住職の話によると、これを見た旅行者の婦人の中には卒倒してしまう人もいるとのことですが、それも無理からぬ作品です*!!! 彼は北斎より前の生まれですが、後半生は北斎と同時代人になっていたと思います。私の所には、多くの画家の作品が一枚の版画の中に納まっているものがあります。これは画家たちが一所に集まって作ったものです*。この版画の中には彼ら二人の絵もあります。応挙の巨大な瀉図は、北斎が百枚以上の畳の上で描いた達磨大師図を思い出させます。この絵は、寺の前に特別に組み合わせた竹の骨組みに立て掛けられます。私は北斎がこの達磨大師を描いているところを表した版画を持っています。桶から絵具を掬っているところや、大衆が取り囲んでいる前で、北斎が絵の上をあちこちと歩き回っているところや、特別な綱で出来上がった絵を持ち上げているところが描かれています。私自身はこの絵を見ることはできませんでした。寺の縁日にしか見せないのです。その代わり、私は東京から二〇露里離れた所にある他の寺に、水彩で描かれた大きな絵（前記のものとは比べものにならないほど小さいのですが）を見るために行ってきました。これは稀に見る傑作でした。想像してみてください。星

が出てくる暗い深夜、両手で聖典を持った聖人が光に包まれて座っています。そして前景には、聖人を打ちのめすことができずに憤怒に悶えている赤い悪魔が描かれているのです。

* 長い巻物で、全過程が順序立てて一連の下絵、または習作が描かれている。

** コレクションの中には二人の画家が共同で作ったため、署名が二つあるものが一、二点ある。

北斎の偉大な才能の典型とも言えるこの絵は、ある時優れた画家のもとに修復に出され、また寺に戻ってきました。しばらく経って、寺にあるはずのオリジナルが数万ドルでアメリカ人に売られたという話が伝わってきました。専門家が呼ばれ調べたところ、寺に戻された絵は、オリジナルと見分けがつかないほどよく似たコピーだったのです。寺は政府に報告しました。オリジナルが見つかって、寺に戻されました。一方、そのコピーはキヨッソーネが膨大な金額で買い、今はキヨッソーネ・ジエノア日本美術コレクションの中にあります。巡洋艦アドミラル・コルニロフにキヨッソーネが訪ねて来た時、自分でこの出来事をすっかり話してくれました。私が寺に行った時、住職はコピーをオリジナルと間違えて保管していたことを思い出して、とても困惑した表情でした。写真を撮ることは許してもらえませんでした。それは私の画集のどれかに出ているはず*です。

* 私にとって、この「日本のドレ」の面白い絵本をみつけた

り、習作や下絵の画集を手に入れた日は、どんな祝日より嬉しいものでした。私のアラキさん（長崎）は、丁寧に切ったり張ったりして修理してくれました。北斎と同時代の日本人は（彼の重要性を知っていた職人たちは別ですが）、あまり彼を認めませんでした。彼の作品に西欧風の様式を感じ取って、それが許せなかったのです。彼はオランダの版画を持っており、人体解剖学を学んだ日本で最初の画家です。当時の日本人は、古風で型にはまった人物画しか認めませんでした。その上、彼は酒飲みでした。私の持っているある下絵には、「ひどく酔っ払って描いた」と書いてあります。これらのことが重なって、彼はとても貧乏でした。今は彼の作品のおかげで、そして重要なことは彼の造形観のおかげで、何万人もの人間が金稼ぎをしているのです。ある掛物に彼は自分の年を書きました。八一歳だったと思います。

北斎や北馬の絵もとても好きです。力とハーモニーがあります。

岸駒に虎を描いてもらうために、將軍は大きな檻を建て、岸駒はそこで朝鮮からの貢物の虎を観察しました。虎は日本に棲息していないので、朝鮮を日本の領土とみなしていた日本の幕府は貢物の一つとして虎を要求したのです。

大きな虎の絵や將軍家の紋が付いた屏風の設計図、その他の岸駒及びその弟子の作品を、私は大津の子孫の所で買いました。私の代理人が資金が足りずに私の所までそれらを運んで来ることができなかったので、私が自分で出かけたのです。しかし、

私もたくさんのお金を持って行ったにもかかわらず、虎と同じ位大きな武士の絵を買うためには、数百ドル足りなかったのです。私はまた出直して来ると約束しました。ですから、日本が中国と戦争を始めたために急遽出航しなければならなくなった時は、何とも言えず残念でした。日本へはその後、もう行くことはありませんでした。

岸岱、岸徳（連山）、岸良！ 彼らは師にふさわしい弟子たちです。私は前から彼らのものを見るといつも買っていました。ここには彼らの習作と下絵がありました。

一人の昔の偉大な画家、金岡について話すのを忘れていました。彼の作品は当時も今も買うことはできません。日本の国宝となっていて、「ミカド」や寺社、皇族が所有しています。私は彼の絵を寺社の宝物殿で見、その後英日展で見ました。私の所には彼の絵が版画になっているものがあります。

今、日本ではイタリアに倣って、特定の画家に限って、そのオリジナル作品を出国させない法律が出されました。私の光琳、応挙、雪舟、英一蝶、山本梅逸、蘆雪、菊池容斎、祖仙、岸駒は、この法律以前にこちらに持って来たものです。

北斎の弟子の中では特に慍々狂斎が秀でいますが、彼が北斎の直接の弟子であったかどうかは覚えていません。（彼の画名からすると、そのはずです。）彼の確かな筆遣いは北斎に劣らず生命力があり、風神雷神、特に鳥（赤い提灯の上に描かれた黒い鳥はとても効果的で、日本人は好んでそれを買いました

た）、馬の下絵を見ると、北斎に近いことがわかります。彼のオリジナルの掛物（私の所には八点ほどあります）、多数の色摺版画、画稿の他に、彼が書いた四巻の絵の教本がありますが、その中に彼が自分で書いた（弟子たちの頼みによって）略歴があります。またそこには、絵の命は筆遣い（coup d'artiste）であるという見解から、昔の日本の画家の作品を例に挙げたり、優れた師について特にしっかりと学ぶように勧めています。（私のために通訳が特別に訳してくれたロシア語訳の略歴の他に）日本語の文章の所々に英語訳が書いてあるのが独特です。

皇室系の土佐派の画家の作品は、私は主に京都で買いました。土佐派は天皇のお膝元で栄え、緻密で、丁寧で、非常に優雅で、貴族たちの洗練されたセンスにマッチし、神道の様式やごちんまりとした天皇の宮殿にも合っています。それに対して狩野派は、奔放な様式で、政権の篡奪者、將軍や武士階級の幅広い要求に応えました。寺の門の上に掲げられた漢字の表札は力強く、美しく書かれており、これは絵と同等に評価されました。寺社の広大な天井画や屏風絵の下絵は、この様式を用いています。

残念なことに、ここへはコレクションのカatalogを持つてきていないのです。記憶だけでは、土佐派や狩野派の多くの画家の名前を間違えそうです。彼らの中に有名な探幽という人がいたのは覚えています。岸駒とその弟子たちは岸派を形成しました。

いくらお金を積んでも買えなかった画家の絵は、（巨匠たち

の完璧なコレクションを作りたかったので）版画になったものを持っています。呉春もその一人です。彼に近い画家蘆雪には、今となつてはまるで私のために描いてくれたと言つてもよいような魚の絵があります。もちろん、彼も他の画家たち（雪舟、一蝶）と同じく、いつか百年、二百年、四百年後に自分の絵が龍や虎や鳥や花と一緒に、ペトログラードに行くことになるのは、思つてもみなかったでしょう。昨日ふいに、山本梅逸の名を思い出しました。日本人がとても好きな画家ですが、それだけのことはあります。彼は蓮の葉の下にいる二羽の青鷺を描いています。菊池容斎の掛物には、軍記物の優れた挿絵画家として「ミカド」から賜った特別の印が入っています。その掛物には羅漢（仏教の聖人）が描かれています。彼の弟子による二点の掛物には、反対に仏教の悪魔が描かれています。

風景画専門の広重、私の所には彼の風景画二点と役者絵一点、その他に数百点の版画があります。彼は北斎やその先駆者、弟子たちとともに、浮世絵師に属します。浮世絵は（土佐派、狩野派、岸派といった上流階級に支持された流派の概念によれば）通俗的で、浮世絵師たちも一般大衆のためにコピーを摺り、掛物はほとんど描いていません。版画のための下絵を描くので忙しかったのです*。

前にも書きましたが、婦人像で（型にはまっています）が優れた作品をのこした有名な歌麿のものも集めました。彼の非常に珍しい画帖も持っています。

役者絵を専門として描いたある画家の名前が思い出せません。ベルリンでは、私は彼の一枚の版画を見ましたが、そこには掛け値なしで四〇〇マルクという値段が付いていました。私のコレクションの中にも、役者を好んで描いた他の画家たちの絵に混じって、彼の作品があります。

芝居好きの日本人は、役者の思い出や記念になるものを大事にしていました。芝居物を描いた画家としては、有名な初代豊国や国貞がいます。(国貞の掛物を二点持っていると思います。いずれにしても一点はよく覚えています。婦人が横たわっていて、上の方に彼の詩か何かが書いてあるのです。)

* これらの版下絵をご覧になれば、きつと興味が湧くことと思います。この絵は版画を彫るために板に貼るのです。だから、一般には版画の形でしか、見る事ができないのです。北斎の画集の中に数点の風景デッサンがあり、それは後に版画になっています。おそらくそのためにデッサンしたのでしょう。

清倍、清長、豊春、写楽、省亭(鳥をまるで生きているように描きます。これ以上上手に描くのは不可能とさえ思われます。彼の四冊の画帖はヨーロッパで本のカットとしてよく使います。彼の掛物を私はペトログラードに持って来ています)。浮世絵師のたくさん名前がそこまで出かかっているのですが、思い出せません。彼らは有名で、コレクションの中にもその作品は山ほどあるのですが、もう長い間、掛物を主に鑑賞しているため、彼らの作品を見ていないので思い出せないのです。国芳、

芳年、月耕(彼の掛物は省亭の作品や昔の版画帖数冊と一緒に手に入れました)。

日本での版画の普及を促したのは、大規模な侍従者を従えて、各大名が江戸に半年滞在することを義務付けた幕府であるということは、今日どこかに記されているでしょうか。昔からの習慣で、国に帰ると「サムライ」は親戚知人に何か贈りものをしなければなりませんでした。彼らは資金が乏しかったので、唯一適当で手頃な土産物が、当時安くて誰にも喜ばれた版画でした。需要と売行きは大したものでしたから、第一に喜んだのは製作者です。江戸幕府二五〇年の間、数百万部が売れました。

また、首都で安く買える物でしたから、買い手も喜びました。そして芸術的で、しかも首都の出来事や生活を多様なテーマで描いてあるので、地方の人々も喜びました。彼らの絵には、文字と共通する書道的な筆遣いが用いられているため、一般の人々にも理解することが容易なのです。漢字は(誰にでもわかるように)「ミカド」から労働者に至るまで、同じ書き順、同じ筆遣いで書きます。従って、日本人にとって文字を書くということは、物や概念を線で描くようなものです。さらに、絵を描く時も文字を書く時も、材料は同じです。すなわち、墨と紙と筆です。我々のように、絵を描く時は絵具でカンパスの上に筆で描き、文字を書く時はインクで紙の上にペンで書くという違いがありません。物象を表す漢字は格変化のような語尾変化をしません。語尾変化の代わりに、他の漢字との間の順番で関

係を表すのです。同じ漢字が動詞にもなり、それも順番によって決まります。従って、文を読む時、日本人は図形を見るように読み、理解するのです。ですから、日本人の想像力はヨーロッパの人間よりも鋭く、我々の場合詳細な説明が必要なことでも、何か一つの記号からすべてを解釈するということがあります。その結果、いろいろなことが可能になります。例えば、我々の画家がレリーフを陰影を用いて表すのに対して、日本人は見慣れた物象の輪郭をはっきりと描くだけで充分なのです。また、我々には遠近法が必要です。といっても、それも厳密な遠近法ではなく、水平面にだけ用い、垂直面には用いません。例えば、家を描く時、誰も写真で撮ったように上の方を狭くしたりしません。壁は真平らに描きます。つまり、我々の習慣でも垂直面では遠近法は用いられないのです。例えば、三階建の家を上にかくにつれて細く描いたら、これは奇異に見えるでしょう。日本人にとっては遠近法は必要ではなく、それは自然に決まるのです。鷹が森の上を飛ぶためには、鷹の下に画家は木々のてっぺんの枝を少し描きます。鷹が地面に立っているのなら、画家は地面の上での姿勢を正確に描き、地面であるヒントを描き加えます。時にはそびえる崖を描けば、それで充分なのです。それで日本人は鷹が地面にいと理解するのです。教養のある人間と画家の相互理解というものがとても発達していて、昔は画家は自分の絵に値段は付けず、わかる客の判断に任せたものですが、値段の食い違いはほとんどなかったと言われ

ています。

国中にどれほど豊富に版画が溢れていたと言っても、それらは今日底をつきました。多くのものは火事で焼け、火鉢（ペチカ）の代わりに炭を入れる箱の煙で煤けたりしました。キョッソーネ、ビング、アンダーソン、フェノロサ（アメリカ人）などといった人々によって、数千点が国外へ持ち出されました。ある時、私は東京の大きなホテルを発とうとして、版画類を梱包していました。一人の給仕がそれを見せてくれと頼みました。私は全部彼に見せました。すると私が大変困惑したときには、彼が泣き出したのです。私は彼に何か悪いことをしたのかと思ひ、いろいろ尋ねました。原因はまったく別のことだったのです。彼は維新までは「サムライ」であった人で（今は貧窮して使用人となり、過去を隠していたのです）、芸術を理解し、このようなかけがえのない物が祖国から消えていくのを嘆かずにはいられなかったのです。このような芸術愛好者は大勢いたのです。続く戦争に連勝した後、このような自国の芸術を愛する人々も、また現れてきたと聞いています。（二枚目の便箋の裏側にこの手紙の終わりがあります。）

前に書いた数通の手紙とこの手紙に書いたことをまとめましょう。コレクションの中にある数千の版画の内、二〇〇〇点以上が外国の標準で一点一〇〇〜四〇〇マルクするものです。

以下、種類別、画家別に作品の数と内容が数えあげられている。より正確にはS・キターエフによって編纂された「日本絵

画の手びき」(サンクトペテルブルク、一八九六年)に記されている。

祖仙は優れた動物画家ですが、自分のモデルたちを観察するために、森林の中で暮らしていたことについては、あなたもきくと読まれたことでしょう。

ごきげんよう。

敬 具

S・キターエフ

S・N・キターエフがP・J・パブリノフに宛てた書簡(二)

(一九一六年八月二〇日付)

パーベル・ヤコブレヴィッチ様

すぐそこまで出かかっているのに、なかなか思い出せなかった二つの名前をやっと思い出しました。英山と国芳です。英山のほうがより才能があり、多作で、婦人や俳優を描きます。国芳は私の好みの芳年の師です。まだウラジミール・モノマフ号に乗っていた頃、一回目の航海の際に、日本の絵画の本を買い、国芳にとっても感嘆しました。今は亡き画家だった兄と、どうしたら線一本でこのように力強く、子供や婦人や男性の多様な感情表現を自由に行うことができるのかと驚いたものです。コレクションの調査を始める時は、狂斎派の四冊の画帖から始めたことを覚えていてください。この中で狂斎は、画家というものは自分が描いている対象の心を見出し、それを表現しなければならぬ、と言っているのです。彼らはどのように己の芸術の課題を理解していたのか、彼らは何を目指していたのか、そして版下絵や版画を見て、彼らは探究していたものに到達したかどうか、それを芸術の高みまでもって行き得たかどうか探るためにも、彼のこの論文*から始めるべきなのです。

* ここで彼は、絵は花と同じものであるとしている。一つ一つの絵は装飾品の役割を果たし、見る人の目を楽しませなければならぬ。大事なことは、これをどのように仕上げたかということが見えないようにし、日本の画家にとってだけでなく、

どの画家にとっても興味深いものでなければならず、かつ表わされたものがそれなりにユニークで美しくなければならない。

北斎の多くの作品の中には有名な「マンガ」「マン」は一〇、〇〇〇のことで、「ガ」は絵のことです。もあります。これは一五冊の小本からなっているのですが、私の手元にあるのは、極めて稀な第一版です。やはり第一版のものとしては、三冊からなる有名な「富嶽百景」があります。まだ私が日本にいた頃、二十余年前ですが、このような第一版は極めて稀なもので、パリから膨大な金額での注文がありました。このことについては新聞にも書かれましたし、私もあなたに手紙を書きました。

北斎が鋳物のために描いた細密画はすばらしいです。筆一本でどうしたらこのような物ができるのか、驚嘆する他ありません。私はよく一晩中見惚れていたものです。今となっては名前を覚えていませんが、北斎の下絵を象牙細工、漆細工、陶器にした職人たちの腕もすばらしいです。私のコレクションの北斎は、キョッソーネの所にあるものよりも充実しています。今思いついたのですが、最初の手紙に書いたものの他に、北斎の掛物が二点あります。その内の一点には、二人の人物が描かれている大きなサイズのものです。

三人の友人、キョッソーネ、ビゴー、ギベラの他に、日本人の知識人たちも昔の絵画を見るために私の所へやって来ました。有名な役者の団十郎(多くの浮世絵師が彼の版画をたくさん描いています。裕福な人で、優れた絵画コレクションを持ってい

ます）も来しました。しかし私にとって最も光栄だったのは、東京美術学校校長、岡倉の訪問でした。彼は東洋美術史の教授で、美術学校で講義を行っていました。この校長のポストには、「ミカド」が自ら彼を選出したのです。今となっては、彼が講義を行っていた美術史の本を所望しなかったことが悔まれます。東洋美術史の本を書くために、彼は日本中のコレクションを見て廻り、さらに中国（日本芸術の源）も旅しました。私のコレクションを、彼は時間をかけて丹念に見ていきました。私は彼の意見を拝聴しました。岡倉はコレクションを評価し、褒めてくれました。それから、美術学校を見学するように私を招待し、自ら校内を案内し、さまざまな美術作品を見せてくれました。記念に美術学校の校史、組織、プログラムが書いてあるものをプレゼントしてくれました。（私の通訳がロシア語に翻訳しましたので、あなたにお見せしましょう。）

当時、婚約者のいた私は、コレクションを目にするであろう将来の妻の気持ちを考えて、不用意にもかなりの数の作品（春画）を同船の同僚にあげてしまったのです。覚えている限りでは、その同僚はセルゲイ・フメリョフ中尉だと思えます。パール・ヤーコブレビッチ様、彼の居所を探したいと思うのです。（もし彼が対馬で亡くなっていなければのことですが。）もし彼が生きていなければお手上げですが、その場合は年金課で未亡人が生きているかどうか、もし生きているとすれば、どこに住んでいるか調べてください。彼女に問い合わせてください、最

初の買手となるのは私ですと。私が行くまでに調べておいてください。これらの絵は、道徳的観点からすればひどいものです。情欲の表現という点においてはたぐい稀なものです。ペトログラードの私の所へ、代理人がこの類のものを持ってきて来ましたが、私が持っていたようなものはありませんでした。もちろん北斎が際立っていました。次に歌麿、その他です。私は北斎の大きな掛物を持っています。そこには追剥が婦人を強姦している絵が描かれているのですが、これは彼の師が表現したものとまったく異なります。

北斎は全く驚くべき自然現象と言えます。あなたも私の所にある数千の絵を見て、それを確信するでしょう。しかしその数千の絵も、北斎の九〇年の生涯に描いたものの十分の一にすぎないのです。ところで、彼の経歴と作品年譜を公立図書館で見つけていただけないでしょうか。研究のために使いたいのです。もしかしたら、そこに歌麿の経歴もあるかもしれません。歌麿の経歴はドイツ語かフランス語で書かれているものがあると思えますが、よく覚えていません。ただこの数十年間、ドイツ人たちが日本芸術の体系的な研究に取り組んでいるのは確かです。しかし、彼らはオリジナルの入手に出遅れました。ベルリン美術館のために、ドイツ人たちがギエルケの所で買ったもののはほとんどが模造品でした。これは、どうして日本の絵画が少ししか展示しないのかとベルリン美術館で私が尋ねたところ、保管係が打ち明けてくれたことです。このことが発覚してから、

すでに私があなたに書き送ったように、ドイツではその方面の識者を日本に派遣したのですが、結果はまったく惨めなものでした。

ハンブルク美術館では日本人の保管係さえるのですが、ここでもきちんとした掛物はとても少ないのです。まずまずなのは版画のセクションと工芸品くらいです。

グリザル氏は私にドイツ語の小さな本をプレゼントしてくれました。これも一緒に見ましょう。浮世絵師たちについて何か書いてあると思います。

一人の優れた画家の名前がどうしても思い出せません。彼の掛物を一点持っています。もう一つの掛物は、すんでのところで人手に渡ってしまいました。というのは、神戸でのことです。が、私は何か良いものはないかと買い物に出かけたのです。その時は、このような逸品に出くわすとは思っても見ませんでした。あるオークションで、一人の商人がその大きな絵を運び込んできたのです。赤いきつつきが古松をついついている絵でした。それだけのことが、なんと力強く描かれていることか。ヨーロッパ人の頭には、これほどの簡素さとこれほどの力強さは、同時にはとても思い浮かびません。商人は膨大な値段を付けました。私は交渉を始めました。商人は少し譲歩しました。私は彼がもう少し値を下げるだろうと思いましたが、そこで愚かにも絵は自分が買うから今船へお金を取りに行ってくると言いかず、その場を離れてしまったのです。(本当は、その絵を見

た途端、どんな値であろうとも手に入れようと決心していたのです。) 一時間ほどで私はお金を持って戻って来ました。しかし、絵は他の人が買ってしまったのです。二日間ほど、私は残念でたまらず、身の置き処さえわからないほどでした。ああ! やっとこの画家の名前を思い出しました。谷文晁です。私の手許にあるのは鷲の絵で、力強く独創的ですが、私が譲ってしまったあの作品とは違うのです。おそらく、あのきつつきは調子の良い時の作品だったのでしょう。日本ではこの画家を熱愛しています。私の先を越してあの作品を買っていったのも、日本人でした。私に文晁の鷲の絵を持ってきたのは、例のドイツ人(名前はメモしてあります)で、私は二、〇〇〇マルクで買い取りました。私の見たところでは、「鷲」は「鷲」ほど良くありません。「鷲」も「鷲」も中国様式で描かれているのですが、「きつつき」は日本様式で描かれているのです。あなたはもう読まれたことと思いますが(もし読んでいなくても、その内に読まれるでしょうが)、多くの優れた画家は、年によって画風が変わるのです。(応挙などの掛物を見るとあなたも気付かれるでしょう。) 長崎派の画家たちは中国様式しか認めないのです。中国様式は優雅さも優美さも備えています。が、無味乾燥なのです。小人のような日本人たちが身に付けているあの円熟した規模の広さと驚くべき力強さが無いのです! 長崎派の画家の絵はたくさんあります。鳥や動物や婦人をテーマにしたものです。どれも魅惑的で興味深いのですが、中国様式を模倣して

いることが感じられます。すでにお話したことですが、日本絵画史の編纂にあたって困難が生じる点は、同じ画家が、さまざまな地方でさまざまな描き方をしていることなのです。(私が思うのに、おそらくその土地の趣味に迎合するからなのでしょう。) 画家は新しい土地に行くと、その土地の画家たちの影響を受けたり、そこで良いとされている様式を請われて、それに従ったりするのです。だから京都周辺に土佐派が形成されたり、東京(江戸が改名された)周辺に遷都とともに狩野派が形成されたりしたのです。

* 習作では多くの絵が細かくて小さいのですが、絵画としては主に輪郭なしで、熟練した筆の運びによって自由に象っているものが良いとされています。

私が絵を収集した町は以下の通りです。東京、京都、横浜、大阪、神戸、下関、長崎、函館、日光、名古屋、敦賀、鹿児島、そして大津、宮ノ下、稲佐、熱海、その他の村々です。私の代理人たち(「おとしよりさん」老人たち)が数年の間に日本中を縦横に駆け巡りました。コルニロフ号に乗っていた頃の同僚エッセンは、私の大勢の「おとしよりさん」たちのことを、冗談で「すけべえさん」(卑猥な人)と呼びました。というのは、必要があれば私が春画も厭わなかったからです。これを日本人は何とも上手に描きます。このようなわけで、私のコレクションは日本全土の美術百科事典でもあります。さらに、日本美術の本から撮った写真まであります。私は日本人が良い版下絵か

ら作った着色石版画も買いました。それは前の手紙にも書いた応挙の「鴨」や岸駒の「虎」などです。ヨーロッパの言語で書かれた本が、日本人の読者のために売られているのですが、そこには日本人が挿絵を描いたりしています。そのような本では、ラ・フォンテーヌの寓話集などを買いました。多くの絵を掛物の表具師*を通じて買いました。

* これらの表具師は、芸術のことなど微塵も解っていないこちらでいう額縁師とは違います。絵を台紙に張り付ける時、絵具が流れたり、色褪せたりしないように特別の技術が要求されます。彼らは字を書いたり、文献を理解することができるので、絵画の取り扱いが容易なのです。

掛物は、湿度の高い季節、または乾燥している季節でも、掛けた時に反るようではいけません。オリジナルが描かれている絹や吸湿性の高い和紙にはこのようなことがよく起こります。腕の良い表具師はこの町でも有名です。私は彼らと付き合ひ、仕事を注文したり、家に招いたりしました。彼らは時には絵を売ってくれることもありました。長崎で買ったもののほとんどが、「アラキ」さんを通して買ったものです。彼らは画家たちを知っていましたし、理解していました。「アラキ」さんは日本の教育を受けた人で、とても感じが良く、しばしば私のもとを訪れて、北斎や応挙や谷文晁などを鑑賞しました。芸術家ならば、彼らに惚れずにはいられません。

機会があったらジェノアに行ってみてください。キヨッソー

ネは自分のコレクションの要は、菊池容斎のあまり大きくない掛物であると考えていました。私はこのコレクションの保管係であるジェノア・アカデミーの会長に、コレクションの中で最良の絵を見せてくださいと頼んだ時、面白いことに彼はこの掛物を見せてくれたのです。しかも彼は私の口から聞くまでは、亡きキヨッソーネも彼と同じ意見であったことを知らなかったのです。私の所にイタリア語で書かれたキヨッソーネ日本美術館のパンフレットがあります。この会長がプレゼントしてくれたものです。これは一緒にあなたと読みましょう。このパンフレットには大きな数々のホールの写真が添付してあります。全コレクションの総額は、会長は数百万だと言いました。出発の前にあなたの所に諸文献を置いてこなかったことが悔まれます。ご覧のように、とても広範囲にわたるものですが、全部箱の中にしまっており、それを取り出すのはコレクションと同時にやるでしょうから、あなたはそれまでに他に何か見つけて読んでおいてください。あなたの仕事関係や趣味と、とても一致する分野ですから、何か新しいことがわかったら、私にも話して聞かせてください。

ペテルブルク芸術振興協会での日本美術展覧会の後、「模造品」というのは適切ではありませんが、いづれにしても芳年の影響が題材にも色彩にも表れている絵を、レリフが自分で描いています。それが類似しているのは、あなたも見ればわかります。日本の絵画の模写はシェボフ、コルマコフなどが行ないま

したが、オリジナルはやはりオリジナルです。パリで、私はある版画家（名前はメモしてあります）と知り合いになりましたが、彼は日本の古い版木を買い、それを見倣って自分の作品を作っているのです。私は彼のアトリエに行ってみましたが、彼は自分が全般的に利用しているその元の版木を隠そうともしませんでした。ドイツ人もフランス人も、北斎や省亭や歌麿、広重などを、したい放題に利用して金儲けをしています。日本は著作権に関する芸術協定を締結していなかったと思います。彼らもまた、ヨーロッパのものを何でも利用したかったからでしょう。

日本美術に関する文献の中で、日本人が我々のように、絵をそこら中の壁に永遠に掛けっぱなしにしたり、慣れてしまつて特に注意も払わない家具のように扱ったりすることは、という指摘を読んだことがあります。しかし日本人の特性として、彼らは毎日のように絵を換えて、その新鮮な印象を味わうのです！ 文学もこれと同じで、優れた文学を時が経ってから読み返すと、前には見逃していた新しい魅力を見出すものです。この方法を日本人は絵の「再読」として用いたのです。その上彼らの美術には、書道の要素があるため、美術的観点と視覚的観点からの「再読」は、完全にその効果を発揮します。

今日、人々は純日本的なものを切に求めるようになり、日本政府は若い画家や職人たちが、昔の画家の作品やそれらの芸術観に触れる機会をできる限り多くするために配慮しなければな

らなくなりました。それには、既成の美術館だけでは足りません。そこで移動展を考えついたのです。寺社や個人のコレクターから一時的に絵を借り、移動展が終わった時点で、入場料を出品の量に応じて分けるのです。このような展覧会を訪れるのは、我が国の場合と違って、職業画家の他に、展覧会が開催された地方の多くの一般住民なのです。これは美術に対する一般の理解が深いのと、美術の中に書道的要素があるからです。このため移動展は赤字にならないように、入場料を最低限に抑えることができるし、これがさらに国民全体の芸術センスを高めることに繋がっているのです。（ここでヤンジュール教授のことかと思ひ出されます。彼は私の展覧会に来て、このコレクションの国家的な意義をコバレフスキーに報告したいと言いました。コバレフスキーは当時の産業大臣で、教授は彼とロシアでの移動展について協議していたのです。この時、コレクション全部を国家が買い取るという話がありましたが、突如コバレフスキーが産業大臣を辞めてしまい、ヤンジュールがコバレフスキー宛てにメモを書いた彼の名刺は、私の手許に残ったままとなっていました。）

おそらく、私はあなたにお話したと思いますが、一八九七年のことです、エリザベータ・フィードロブナ皇女はとても優れた水彩画家でもあられるのですが、月耕のある色摺版画をオリジナルとみなしておられ、私がそれはコピーであると申し上げた時、とても困惑なさいました。もちろん、私も困惑したので

すが、しかしそれにもかかわらず、皇女はご自分で模写したいとおっしゃいました*。私は画帖をプレゼントとして差し上げたいと申しましたが、皇女はコレクションを分散させたくないとおっしゃり、もし私がまったく同じものを入手すれば、それを喜んで受け取るとおっしゃいました。私は同じものを一所懸命探しましたが、無理なことがわかりました。まずこれは、小さな家内工業的な仕事場で作られたもので、出来上がるとすぐ買われていってしまったこと、また月耕自身がこれらの作品を手許に集めておかなかったことが理由です。このような訳で、皇女に画帖を差し上げることができませんでした。

* この版画は、日本の女流詩人が月夜の晩、竹林の中にいるところを描いたものであると私のメモにあります。ステパノフ將軍を通して、皇女は画帖を返してくださいました。そこには、皇女が謝意を伝えておられると書いた將軍の手紙が添えられていました。

日本で月耕の許を訪れた時、私は彼の筆が描きだす作品に自分がどれほど感銘しているかを語りました。仕上がつている掛物は彼の所になく、私はほとんど何も手に入れることができません、がっかりして彼の許を辞して来しました。ですから、ペトログラードで彼のオリジナルを受け取った時、どれほど嬉しかったかはあなたにもわかっていただけるでしょう。もっとも彼の許を辞して来た時、まったく手ぶらだったわけではなく、彼は自分の絵を摺っている工房のリストを私にくれたのです。これ

らの工房で、私は多くの絵を手に入れました。その内の一つがエリザベータ・フォードロブナのお気に召した絵だったのです。多くのオリジナルを見て、皇女はお褒めになりました。西欧諸国を廻りながら、私はいたる所で月耕の絵を探しましたが、あまり見つかりませんでした。それも特に優れたものではなく、私も持っているものでした。私の心の友、芳年のものは、西欧ではどの美術館で尋ねてもありませんでした。あなたも彼の絵は、並み以上の関心を払うに値するものであることを、ご覧になって理解されるでしょう。

日本では新しい欧風にならない、年貢が現物の米からお金に変わり、民衆から税金を集めるようになったので、お金の価値が非常に上がり、昔の芸術品の値は、絵でも何でもとても下がってしまいました。封建制度が崩壊すると、文明階級（武士）の恵まれた生活も崩壊しました。（武士階級が芸術をいかに理解していたかについては、私は前の手紙でその例を書きました。）彼らが貴重な蓄財をはたいて買った芸術品は、一部は彼ら自身の意志で、一部は貧しさに強いられて、市場に出ていきました。これを素早く利用したのがヨーロッパ人、特に日本政府に招かれて、芸術やあらゆる分野の学問の啓蒙のために来日した文化人たちでした。そうした活動は一八六〇年頃から始まり、みごとに作品を収集してヨーロッパやアメリカに帰国すると、そのコレクションの研究をしながら、自分の国でこれらを紹介し始めました。ヨーロッパからの外交官たちも一役買いました。し

かし、いつもロシア人に関しては「しかし」が付きますが、ロシアの外交官たちは芸術に興味を示さず、買ったとしても家具でした。ただ一人、ヒトロボが家具の他に武器やその飾りを買うくらいでした。海軍大将で、多分シュタケルベルクという名前だったと思います、名前からおわかりのように彼はドイツ人ですが、ただ痩せてはいませんでした。彼は海軍幼年学校校長ボーイン・アンドレエビッチ・リムスキー＝コルサコフの娘と結婚した人物で、彼が造形美術のすばらしい作品を持っていたという話です。今、それがどこにあるのかわかりません。それに自分で見ていないので、どれほどのものなのか判断もできません。

アレクサンドル会社のトレイベルクの所で私が選んだ絵は、あなたもペテルブルク芸術振興協会で一九〇五年にご覧になりましたが、これはトレイベルクが偶然にある日本人からほとんどただ同然で買ったものです。いつのことかわかりませんが、この日本人はこれらの絵でペトログラードの人々を驚かしてやろうと思ったのですが、その頃の人々は日本のことなど考えてもいませんでしたから、彼はすっかり破産してしまいました。今、それがどこにあるかわかりません。一部は日本へ戻って行ったとも考えられます。日本人は今、外国にある日本の造形芸術の秀作を捜しており、買えるものは買って祖国へ戻しているのです。このことを私に話してくれたのは、ベルリンにいた元日本領事のヤコビ（ドイツ人）でした。また彼は、ドゥルノボ

「趣味のコレクションと賢人が描いてある掛物を見せてくれました。（この類のものは、あなたも私のところでご覧になるでしょう。）これらを彼は偶然五、〇〇〇マルクで買ったのです。画家の名は思い出せません。ヤコビは私に自分の名刺を渡して、文晁を二、〇〇〇マルクで買ったというある知識人に紹介してくれました。この人は買った掛物を私に見せてくれました。私はヤコビにお礼に一九〇五年の展覧会の写真を送りました。こちらへ戻る途中、私はある日本人に会いました。彼は私に大阪のある会社を紹介してくれました。美術品を売買している最も大きな会社とのことでした。その会社到手紙を出しましたが、返事はまだ受け取っていません。私はその手紙で、私が英日美術展で見た出版物を所有しているかどうか尋ねるのを忘れしました。その出版物は限定出版だったと聞きましたが、何部かは覚えていません。私は「絵画屋」とかいふ名前の雑誌を二、三年分持っています。彩色版画はともきれいです。これは廃刊になったそうです。外国でもこの雑誌は見ませんでした。（私はベルリンやドレスデン、ハンブルク、パリ、ロンドン、ローマ、ナポリ、フロレンスで探してみたのですが。）

私の所にあるような巻物は、日本にいた時キョッソーネの所で見ただけです。前回の手紙で「L'art Japonais」の著者の名前を間違えました。ビングではなくて、ゴンズです*。もっともビングが自分のコレクションについて書いた絵入りの大きな本もあります。お話したように、手に入れようとしてみたのですが、

できませんでした。どこかの図書館にあるでしょうか？

* ゴンズがその中で、ビングと彼のコレクションについて書いているので、間違えてしまいました。ビングのコレクションはもう存在していません。パリでばらばらに売られてしまいました。この本はコレクションのオークション（数百万フラン相当）の前に、純粹に芸術を評価するフランス人の間に、このコレクションを宣伝する目的で書かれたものです。フランス人もこの点では日本人に引けをとりません。ここで私のいう日本人とは、日本の大衆全体のことです。

パリには、ポーランド人チエルヌスキの遺言によってパリ市に寄贈されたブロンズのすばらしいコレクションがあります。日本では、チエルヌスキが大きな仏像を買ったという話を聞いて、ある仏教徒が彼を殺そうとしたということです。しかし失敗したために、彼は仏像の手を切り取ってどこかへ持ち去ったのですが、後でそれは発見されました。この話の最初の部分が本当かどうかは知りませんが、後の部分は本当です。私は自分の目で手がハンダ付けされているのを見ました。コレクションは大きな家一軒を占めています。このコレクションの中には、純粹な美術品は少ないです。パリの諸美術館でも、良い掛物は見られません。隠してあるのかもしれない。（保管係員の話では、それらしい様子もありませんでした。）キョッソーネは遺言でそのコレクションにふさわしい展示の場所と配列を求めましたので、それは平たいガラス製の棚の中に壁に沿

トで探してみましよう。Vio.氏とか言ったと思います。

って展示されています。ロンドンにあるものも、私を満足させるには至りませんでした。ドイツ人が手に入れた五〇点の絵の方が、イギリスにあるものより優れています。イギリス人も、もしかしたら良いものは隠しておくのかもしれませんが、そうだとしたら、何故このセクションに「日本の部」という名前を付けたのでしょうか。きっと良いものがないのだと思います。キョッソーネ美術館のリュクソロ館長は、パリとロンドンに行つて、コレクションを公開する時の絵画の展示方法を学んできたと言いました。アメリカの方が良いものを持っています。フエノロサとかいう富豪が、日本美術を山ほど買ったそうですが、それがどこにあり、公開されているのかどうかわかりません。彼はボストンに住んでいるようです。パリでは仏日協会の会員の一人で、ある愛好者がいます*。彼と私はロンドンの英日美術展で一緒になり、彼は私を家に招待してくれたのですが、私がフランスに行ったのは秋のことで、彼は別荘に行っており、本人に会うことさえできませんでした。噂に聞くところによると、彼の版画のコレクションはすばらしいそうです。版下絵は、彼が自分で言っていました、興味がないそうです。本当に版下絵が面白くないかどうかは、ペトログラードの私のコレクションを見てから決めましょう。

敬 具

S・キターエフ

* 彼の名前を私の持っている仏日協会の年鑑にある会員リス